

人権コラム 心、豊かに

◆ 最大限の「回避」

「新1年生の担任教諭、勤務先の入学式に出席せず、わが子の入学式に」。

昨年春の出来事が物議をかもし、賛否両論が分かれる大論戦に発展しました。肯定派は「先生にも人間としての基本的な人権がある、ときには家庭を優先してもいい」と擁護。一方の否定派は「職務放棄、教育者としての自覚・責任はないのか」と厳しく批判。両論ともに間違っていないような気もしますが、論戦によっていずれかの意見が勝ったとしても、それが解決策になるわけではありません。

平成19年に策定された「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）憲章」では、仕事のために私生活の多くを犠牲にし、家庭を顧みる時間がなくなることが、社会の活力の低下や人口減をもたらしていると指摘しています。もしかすると、前出の担任教諭は、わが子に辛い思いばかりをさせていたのかもしれない。「一度だけでも、わが子の人生の節目を見届けたい」という親として当たり前の願望が強く表れた行動だったのかもしれない。

一方で、入学式に担任が不在となった生徒の気持ちを確かめることも必要です。生徒にも担任を擁護する意見や残念な感情を表す意見などが混在しているのではないのでしょうか。いずれにしても、当事者の心情やそのときの状況を脇に置いた第三者の意見によって、当事者の「意識」ばかりが責められることは好ましくありません。

人生の各段階における「選択」や「優先」によって、何かが犠牲となることは、あらゆる場面で今後も起こりうるものです。創意工夫が凝らされた事前の対応（話し合いなど）によって、寂しさや辛さを可能な限り回避していく社会の創造が望まれます。